

今月の谷口雅春先生のお言葉

生命をかけて国に殉じた人々の魂は高貴である

日本は自己の犠牲により東亜民族を解放した

日本は大東亜民族の解放の旗幟をかかげて戦ったのである。そして日本は侵略国として色々の汚辱を蒙ったけれども、それは恰もキリストが十字架に釘つけられたのと同じことである。「人を救いてみずからを救い得ざる者よ」と当時のユダヤ人は十字架のキリストを嘲笑したけれども、この汚辱ある刑罰の中に彼は全人類を解放したのである。それと同じく日本は「侵略国」と云う汚名の下に侮辱され、戦争犯罪人と称して裁判にかけられ、

上衣を奪われて十字架の上にのぼったキリストのように領土の十分の四を奪われたけれども、その犠牲によって、

東洋民族は自己の内部に、西欧民族と同様に尊ぶべき人権が、尊ぶべき「神性」が、宿っていることを自覚することを得たのである。それまでは、多くの東洋民族はみずからの無自覚によって自縄自縛していたために白色民族の支配下に土地はその植民地となり、人間は奴隷の如き生活を送っていたのである。日本の蹶起のために多くの東洋民族は目覚めた。西洋民族と同じように彼らも神が平等に造った神の子であり、「何でも出来るぞ」と云う自覚を得たのだ。かくて東洋民族は続々として白色民

族の桎梏から解放されて独立したのである。

(新装新版『真理』第4巻79～80頁)

あらゆる欲望を捨て去って

国に殉じた人々の生命は祝福されている

日本の殉教者は焔の中に日本を讚美する歌を歌って飛行機と共に墜落して往ったのであります。恐らく彼等は肉体的苦痛を超越し得た程度まで、理想が彼らの魂を昂揚させ、神が彼等の心境を祝福し給うたのであります。彼らにとつては彼らが軍閥に瞞されていたとか、結果がどうあるかとか云うようなことは問題ではなかつたのです。彼らはそのような物質的なもの、現世的なもの的一切を捨て、唯、彼らの心の中にある「理想日本」のために、彼等の肉体に対する凡ゆる欲望を捨てたのであります。これはキリストのゲッセマネに於ける祈りに相応するものであります。彼らはここに於いて総ての肉体的な意欲を神に引渡したのです。「神よ、願わ

くはこの苦き杯を吾より取り去りたまえ。されどわが意をなさんとは非ず、み心の如く成らしめたまえ」と彼は祈りました。この祈りの心境には個人意欲の完全なる放棄があらわれているのであります。それは愛する家族を、父母を、妻を、子を、すべての事業と計画とを捨て去って、日本の理想のために、ただ一路「生命死なん」と出発した純情の愛国の若者の精神と同じであります。

(新装新版『真理』第4巻325～326頁)

特攻隊員は高き理想に生きた殉教者である

殉教者達は、殉教の苦痛を耐え忍ぶと云う尊き莊嚴な目的の為に、地上に生れ来つた所のいと高き優れたる魂であるのであります。彼等は或る理想を描く、そしてその理想に殉ずると云う莊嚴なる行事に依つて、一躍跳入して霊の世界に於ける最後の段階に達せんが為に暫く此世に生れ来つた魂であります。私は斯う云う人達を戦争中、多くの特攻隊の青年に見たのであります。

(中略) 彼ら青年は、或る理想を描いて、その理想を肉体的自我よりも高きものとしてそれに殉じたのでありました。彼等に於いては肉体的自我の死を通して唯一つ魂の理想とするところのものが完成せられるのであつて、戦争は逆縁ながら、彼らが魂を浄化し、絶ち難き肉体的欲望や家族に対する愛着を断ち切り、それによつて最後の目的としているより大きな目的なる、新しき生命——不滅の理念——と一体なる新しき生命を見出そうとしたのであります。彼らは形の世界に於いて、自己の欲する全てのものを失う。否、単なる形の世界だけでは無い。愛情の世界に於いてさえも、理性の世界に於いてさえも、将又意志の世界に於いてさえも、彼等は、すべての現世的な一切のものを失う。併しそれにも拘らず「生命を捨てんと欲するものは生命を得」と云うイエスの聖言の如く、彼らは神の国に於いて永遠なる聖所に高く揚りたる生命を見出すのであります。その永遠なる聖所に於ける生命は地上の如何なる価値よりも、尚一層高く遙かに貴き価値を有するのであります。彼らにと

つては殉教と云うことよりもより少き何物も、彼等の魂を満足せしめなかつたのであります。彼等の魂にとつては殉教者としての光荣ある運命を甘受するほかには何等の喜びをも見出すことが出来なかつたにちがいない。それが彼らの此世に生れ出た使命であり、生れつきであつたのであります。その殉教者の光荣ある運命をば、彼らはみずからハッキリとは意識的には知らなかつたかも知れないが、自己の肉体を殺す事によつて、或る理想(理想とは肉体ならざるもの)に一体となろうとしたのであります。若し彼等が、肉を惜しむことによつて理想への殉教を拒むならば、彼らは自己を顧みて自身を総ての人々の中で最も見窄らしく、憐れむべき卑怯者だと感じなければならなかつたであらうと思われまふ。彼らにとつては殉教は「肉」を超えて「霊」的勝利に到達するために選ばれた唯一の道であつたのであります。私は彼らを礼讃する。

(新装新版『真理』第4巻322〜324頁)